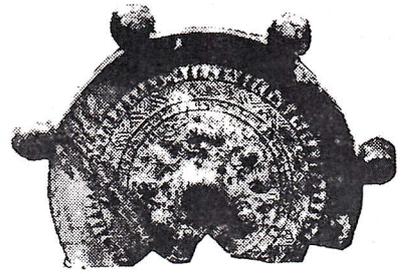


文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七 鈴 五 獸 鏡

先輩の贈り物に感謝

会長 佐藤 光一

故青木桂二さん（剣在住）が遺された、大正七、八年（一九一八〜一九一九）ごろの中剣以南の図面を紹介したいと思います。

これは青木桂二さんが満六五歳の、昭和五年（一九七六）一月に、大昭七、八年（一九一八、一九一九）ごろの中、下剣地区の屋号・所在を、記憶をたどりながら書かれた地図である（縦五五センチ×横一七三センチ）。興味深い記録が、此処彼処にある。

まず家の所在である。一軒一軒屋号を添えて、丹念に記録されている。現状しか知らない者にとっては、百年近く以前の様子は想像を超えたものがある。勿論鉄道はまだ敷設されていない。道路も主なものは、県道（現在の旧道）と下街道で、次のように書いている。「県道の直線である。現在の下剣現丸屋付近から上剣畑中長四郎宅まで、直線約三キロ、歩む人は見透しよくて歩むことを辛く思ったそ

うだ。五〇米―五〇米ごとに、

八幡―白鳥間の電信電話の木柱が道の路肩に立つ。人達は電信棒とよぶ。冬の雪道を下駄で歩む時は、この根元を下駄先でけりながら、下駄の雪を落とす。――

○大正七年、上之保水力電気株式会社設立。

社長 野田光次郎、出力二〇馬力、タービン発電、灯火用、発電所名皿部、電工佐藤佐一郎・加藤京次郎、集金係河合治助。

○大正八年（一九一九）剣消防団設立。組頭野田光次郎、副組頭山田銀助、小頭佐藤米次郎・佐藤増次郎ガソリンポンプ。

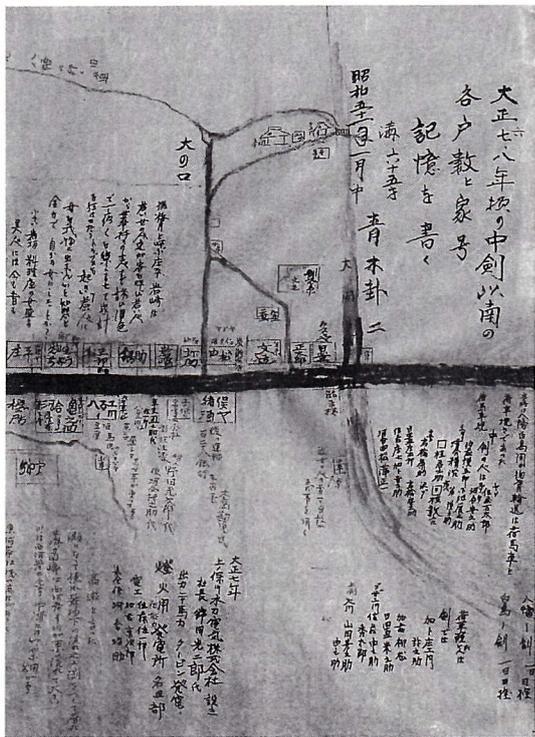
八幡の大火には、剣の消防隊は新鋭ガソリンポンプで大変な働きで、町民に喜ばれた。

○校歌制定 松野数代校長作

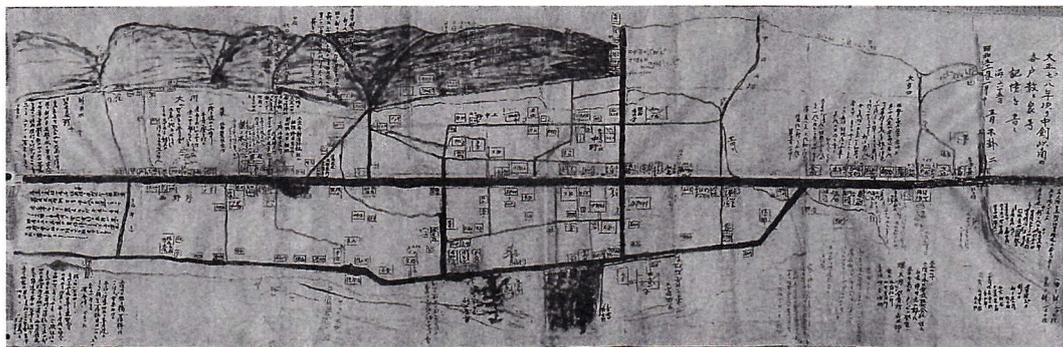
一、清き流れの上保川
水の力で燈す灯は
光あまねくかやきて
栄え行く様のたのもしさ

二、村も弥富も学びの舎
その名に恥じぬ心もて
つとめはげめよ諸共に
清き流れを流さなん

記録されていることの一端を取り上げてみた。この一枚から、私たちは当時の剣地区の自然・



①大正7.8年ころの剣地区絵図(部分)



②大正7.8年ころの剣地区絵図(全図)

文化・民俗など多くの貴重な資料を得ることが出来る。

(撮影 白鳥町大坪良彦氏)

大和町観音堂石仏のこと （信州高遠の石工の足跡を訪ねる）

日置 智夫

子供の頃より馴れ親しむ観音堂。ここに三十三体の石仏があり、附近の石仏とは違っている。誰が造った物なのかと作者を知りたく思うようになり、各地の石造物を見て廻るうちに、郡上の中で五ヶ所に、それらしき足跡を見つけた。石造物は、いずれも作者名が無いのが普通で、唯一、美並町の星宮神社にて、石工守屋甚内将当盈と名前が刻まれているのを見つけた。市内五ヶ所を時代を追って示すと次のようになる。

最初は、白鳥町長瀧寺の宝篋



①長瀧寺の宝篋印塔

次に大和町観音堂三十三観音。弘化三年（一八五〇）寄進者の名前は刻まれているが、作者名はない。下の台座は四角形で、横四十六センチ×高さ四十三センチ。中心に高さ四センチの円形凸起がある。その上に直径四十七センチ×高さ十六センチの蓮座があり、三段

印塔。天保四年（一八三三）石工信州甚内親子と塔の前のプレートに記載されている。横一・二五センチ×高さ一・四五センチの石組みの上に、約五メートルはあろう宝篋印塔で、圧倒される思いの石造物である。これを造るのに三千人講を結成し、浄財を集め、天保四年に造ったとある。

当時宝篋印塔は礼拝供養すれば、生きている間は災害を免れ、必ず極楽に生まれ変わると云われ、この様に多数の作善が行われた。



②剣観音堂の十一面観音

目が尊像である。一番様と三十三番様は大きく、横四十センチ×高さ八十センチ前後である。この外は、下の四角型は、横四十センチ×高さ十九センチ、円形の四センチの凸起、蓮座は四十四センチ×高さ十四センチ。尊像は六十六センチ×六十七センチ。一体につき三個の石材の組み合わせになっているので、九十九個の石を使用したこととなる。他の地方の石仏は、尊像と蓮座は一体に彫られており、この様な造り方は稀である。なお、現在の石工に見てもらったら、石材は長良川の石（玄武岩）と

この観音堂の参道を上り詰めるところにある古墓群には、宝篋印塔の残欠一基、五輪塔十二基、寄せ集められた円型の水輪十二個、火輪三個、いずれも花崗岩で造られており、地輪三十センチ×二十八センチ、水輪二十センチ×十七センチ、火輪十五センチ×十七センチ、風・空輪は、二十五センチ×十七センチと、他に二・三センチの小さい物の二種類がある。これらは、おそらく大和・京都・近江の産で、関西から運ばれたものと思われる。



③穴馬の十一面観音

この場所立ち、大きな礎石が幾つも残されているのを見ると、ここに七堂伽藍があったと唇は小さくV型で、衣文は図案化されていて美しい。この頃西国三十三観音巡礼の出来ない人達のために、この様な石仏が各地に造られた。観音堂は天保十四年（一八三三）荒廃していたお堂の跡地を、剣村大間見村の有志によって再建された。この辺の事は会報「文化財やまと」第三十二号（平成十九年六月発行）の佐藤光一さんの記事を参照されたい。

云われても不思議ではない。『大和町史』にも鎌倉・室町時代と記載されている懸仏や金銅仏、陶片などの出土品がある。文永八年（一二七二）長瀧寺が焼失し、多くの焼け出された僧侶たちがこの山に住み、大般若経の写経をしていたかも知れない、などと思いを馳せる。残念ながら、この観音堂の記録は一切ないとのこと。その後弘化三年（一八五〇）大間見・剣両村の有志が観音像二体の建立を藩庁に願い出て、三十三観音像を建立した。そのため、藩庁より二体を除く三十一体の撤去と、過料三貫文が申し付けられている。七番様と十七番様は作風がよく似ているので、代官所に申請した時の二体かと思われる。

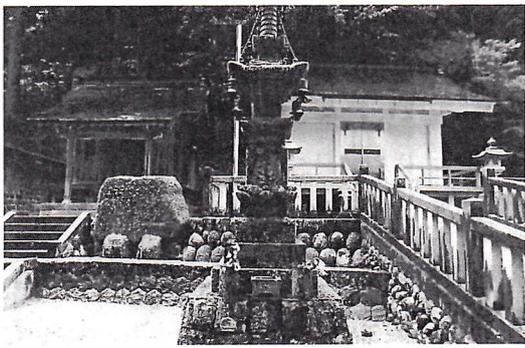
次は、福井県穴馬の十一面観

音立像一体。やはり作者名は無
い。横四十センチ×高さ九十六センチと
尊像は大きく、蓮座直五十六センチ
×高さ十六センチ、茶色の砂岩。尊
像は玄武岩で造られている。尊
像の頭部の飾りは大和町のもの
と同じく、蕨紋と菱の連なりが
あり、顔も瓜実顔で美しい。衣
文やすべてが大和町のものより
もデフォルメされているので、
大和町の観音を造った後での会
心の作と思われる。国道一五八
号線を、油坂を超えて市布の標
識を少し下った所の右手に原家
の墓地があり、その中に鉄製の
祠に安置されている。原家は上
穴馬の大庄屋を代々にわたって
務めた家柄だったとか。約五十
年前に、人々の暮らしと共にダ
ムの底に沈んだ。まだ石仏たち
があったかもしれないが、今は
なすすべもない。この墓標は子
孫の人達によって移され、お守
りされているのか、いつも花が
手向けられている。

八幡町安久田に地藏菩薩が一
体ある。国道一五六号線から安
久田へ行く途中の峠右手にあ
り、横二十センチ×高さ五十センチと小
さく、玄武岩の荒い石で刻まれ
ている。雰囲気は穴馬の十一面
観音とよく似ている。赤い顔料
が少し残っていて可愛らしい。

穴馬の仕事を終えて、彼らが高
遠へ帰る途中に、そつと置いて
行ったのか、野の仏に相応しい。
木製の小さい祠に安置されてい
る。

美並町星宮神社(ほしのみやじんじや)
の燈籠一對。嘉永四年(一八五
一)石工守屋甚内将盈の刻名が
ある。これを見た時は驚き、且
つ感激をした。今までに見て来
て疑問に思っていたことが一気
に解決した思いになった。長瀧
寺の宝篋印塔を造ってから十八
年後の郡上での仕事である。礎
石は一・一五メートル四方十段の組
石。総高三・三メートル。猫足の上に
四角型の竿と大きな笠が乗り、
他の燈籠よりも一段と大きく優
雅な姿で、高遠の石工の気概を



④星宮の宝篋印塔

感ずる造りである。同じ場所、
四年後の安政五年(一八五五)、
再びの宝篋印塔、石工守屋将盈
の刻名があり、沢山の寄進者の
名前が刻まれているが、寄進者
名よりも一段上に自分の名前を
刻んであり、「能於此搭一香一花



⑥宝篋印塔作者の刻印



⑤宝篋印塔上段の観音像

礼拝供養」と見事な文字。長瀧
と同じ文が彫られている。三段
の石組みの上に、高さ四メートル、上
段部に四面の約二十センチの円型
があり、その中に観音坐像が四
体彫られている。小さいが、同
様に頭部の飾りが蕨紋と菱の連
なりで、まぶたも細長く一文字、
唇もV型で良く似ている。相輪
から銅製の飾りが付けられ、笠
の四隅には釣燈籠があり、当時
はキラキラと輝き、美しく映え
ていたことと思う。この様に飾
りを付けられた宝篋印塔は見た
記憶がない。高さ四メートル、長瀧
寺よりも小さいが、洗練された
美しさを感じる。

以上五ヶ所の特徴から、守屋
甚内親子の菩薩の頭部の飾り、
蕨紋・菱の連なりは、彼らのメ
ッセージのように思えてならな
い。大和町の三十三体の中に二
人から三人の技が見て取れる
(親・三人の子)。当時信州高
遠の石工は、旅をしながら各地
に石造物を造り、技を競ったと
云われ、中でも守屋貞治は文化・
文政の頃に美しい石仏造りの名
人と云われていた。また、この
頃に鶴沼を中心に、県(あがた)
一族と云う石工集団があり、六
代目範右衛門とその門弟達が、
中濃・東濃から、対岸の犬山に

かけて活躍していた時、守屋甚
内親子は、誰よりも良いものを
造ろうと思っていたに違いな
い。剣村・大間見村の人達が、
彼らの技を見込んで、浄財を集
め、注文をしたのかと思う。ま
た、長瀧の宝篋印塔を建立した
豪潮律師は、高僧として諸大名
の帰依を受けていたが、晩年は
尾州徳川家に迎えられて、全国
に八万四千基の宝篋印塔を建立
すると云う大願をしていた。そ
の中の一基が長瀧寺の宝篋印塔
で、当時の名工守屋甚内は豪潮
の眼鏡にかなう仕事振りだった
と思う。

以上から大和町観音堂の石仏
は、誇り高い信州高遠守屋甚内
親子によって造られたと思う。
いずれにしても、素晴らしい名
品である。

江戸時代の中期元禄から宝
暦、寛政、文化、文政、天保期、
石工の仕事が全国に広がり、石
仏が多く建造された時、長瀧を
中心にして信州高遠の石工たち
が足跡を残していると感じる。
この一年ばかり、郡上の石仏
を尋ね歩いたが、この外にご存
知の方があれば、お知らせ頂け
れば幸せである。

春季日帰り研修

琵琶湖遊覧（竹生島へ）と

湖岸の古刹をたずねて

細江 幸久

四月十九日（金）二十四名の参加で実施

春の研修先は、滋賀県彦根市の五百羅漢天寧寺、竹生島の宝厳寺、向厳寺（彼岸寺）観音堂の参拝と琵琶湖の遊覧、長浜市内散策であった。

天寧寺は、井伊直弼公の父である十一代藩主、井伊直中が建立した、曹洞宗の寺。自分の探し求める人に必ず出会える「亡き親・子供に会いたくば五百羅



①天寧寺の五百羅漢像

漢の堂に籠れ」といったとの伝承で広く知られている五百羅漢。案内書には、文政二年（一八一九年）の春、男子禁制の槻御殿（現在の楽々園）で大椿事が持ち上がった。奥勤めの腰元若竹が、お子を宿しているらしいという風評が広まり、それが藩主の耳に届いた。大奥の取り締まりのためにも相手の名を詰問したが、口を硬く閉ざして相手の明かささない。遂には不義はお家の法度であるという掟によって御手打ちとなった。後になって若竹の相手が長男直清であったことがわかり、直中公も不知とはいえ若竹と腹の子（初孫）を葬ったことに心を痛め追善供養のため京都の大仏師駒井朝雲に命じて五百羅漢像を彫らしめ安置されたのである。仏殿（羅漢堂）内には、本尊釈迦如来・十六弟子・十六羅漢・五百羅漢の併せて五百二十七体が安置されている。その数の多さに圧倒さ

れた。隣には、井伊直弼公の好みで作られたという、石州流庭園と遺品を埋葬した供養塔が建っていた。

この日は琵琶湖が波風ともに強く、彦根港の遊覧船の出航が危ぶまれ、しばらく様子を見るという予定外のことも起きた。運行が決まって竹生島港までの航海は、まるでジェットコースターのように上下に激しく揺れ、船上では食事どころではなかった。みんな生まれ初めて初めての体験だったと思う。

竹生港に到着したときはほととしいた。宝厳寺へは、急な階段が続いた。本堂には本尊の大弁財天と、観音堂に千手観音を祀る。日本三大弁財天の一つ。そ



②竹生島宝厳寺の唐門

の中でも最も古い弁財天。そのため当山のみ「大」の字をつけ、大弁財天と称している。開山時（七二四年）聖武天皇の勅命をうけ、僧行基が開眼した。本堂は昭和十七年再建。国宝の唐門は秀吉が建てた大坂城極楽橋の一部で現存唯一の大坂城遺構で、京都東山の豊国廟極楽門に移築後、豊臣秀頼の命により竹生島へ移されたものである。松皮葺、建物全体を総黒漆塗りとした上に金塗金の鍔金具が散りばめられ、豪華絢爛と言われた桃山様式の代表的遺構である。重文の千手観を納めた観音堂は、西国三十三所観音霊場めぐりの三十三番札所で古くから多くの人々の信仰を集めている。次に海津大崎港へ向かったが、波風も少し

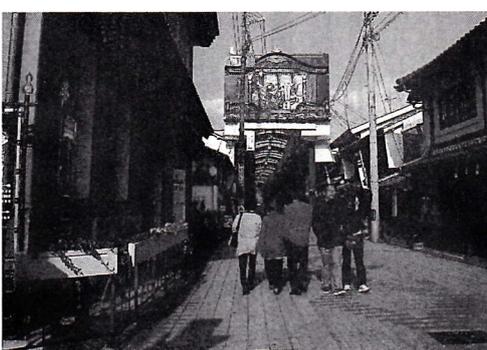
取まっていた。バスから眺める湖岸の桜は満開で、私たちを出迎えてくれた。渡岸寺観音堂では、聖武天皇の勅願により彫られたと伝わる国宝十一面観音立像をすぐ目の前に四方から拝観できた。優美な十一面観音立像は日本彫刻史上の最高傑作であるといわれる。観音さんの優しいお顔を拝観できて船の揺れの恐ろしかったことを忘れることができた。

最後に長浜市の黒壁スクエアを訪れた。ガラス館でガラス工芸作品を見学した。

短い時間の研修であったが充実した一日であった。



③渡岸寺の本堂



④長浜黒壁スクエア

「秋季日帰り旅行」

紅葉深まる湖東三山めぐりと

焼き物の町・信楽を訪ねて

研修部副部長 村井紀幸

前日までは天気が悪念ざれていたが、幸い好天に恵まれて、

十一月五日、多賀大社の拝観、湖東三山の紅葉や文化と歴史の探訪、信楽の狸を代表とする焼き物を堪能した。参加者は二六名だった。

◆多賀大社◆

「延命長寿」の神様として信仰を集める多賀大社。楡皮葺きの拝殿は、なかなか壮麗である。

この日は「大宮祭」の当日で、黒塗りの高級車から斎服姿の神官が三人（内一人は「御」を俸持）が降り立った光景にたまた

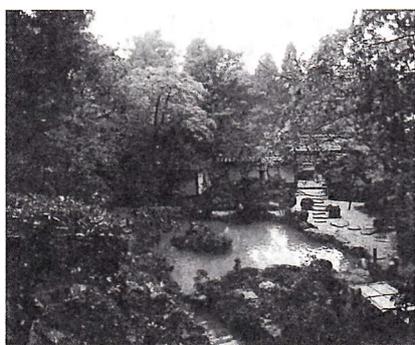


① 壮麗な多賀神社拝殿

ま遭遇し、当社のもつ格式の高さが感じられた。

◆西明寺◆

参道脇に造られた名勝「蓬萊庭」は、立体感のある庭園全体に様々な仏をかたどった立石が各所に見事に配されており、趣があった。



② 西明寺名勝「蓬萊庭」

山頂の本堂と三重塔（鎌倉期建築）は、ともに国宝で、折しも庄巻の紅葉でおおわれていた。

◆金剛輪寺◆

到着後、すぐに境内の侘びた食事処「華楽坊」での昼食とな



③ 紅葉におおわれた三重塔

り、旬の食材を使った滋味溢れる精進料理を堪能した。

湖東三山の中心的存在であると思われる当山は、奈良時代に行基が開山した寺院である。秘仏である本尊「聖観音菩薩」は、彼が彫る際に、木肌から一筋の生血が流れ、観音に魂が宿ったという言い伝えが残る。

本堂や重文の三重塔は、「血染めの紅葉」と呼ばれる、深い赤と黄色の紅葉の、真つ盛りであった。



④ 本坊 喜見院庭園

◆百済寺◆

聖徳太子の発願で百済国の梵閣龍雲寺を模して創建された。湖東三山最古の寺であり、参道の磨かれた漆黒の石段や両脇に並ぶ石仏と赤い前掛け、山門や本堂を包む真つ赤な紅葉などが、絢爛豪華な風景を醸し出していた。本坊「喜見院」庭園は、

鈴鹿山脈を借景に、変化に富む地形を生かした庭園で、「天下遠望の庭園」と称される。最上位に立つと、遠く琵琶湖も遠望できるほどで、合点がいった。

◆信楽伝統産業館◆
旅の最後は、甲賀市信楽町散策で締めくくった。

産業会館では、信楽焼の歴史や古い時代の作品を見学した。町に入る途中車窓から見かけた2匹大の狸にも驚いたが、当館の展示物の中には風呂桶に使用されている例もあり、思わず目を見張った。

その後、各々自由行動での散策となった。小生は係だったので、集合場所などを確認しながら市内を巡回していたが、一向にメンバーを見かけないので少し心配になった。時間が少しあるので「お茶でも飲んで、ひと休み！」と、中心街の喫茶店に入ったところで、びっくり仰天。

何と、大半の人達がそこで休んでおられたのだ。どなたも、湖東三山の長い参道を歩き、相当くたびれた様子だった。

◆帰りのバスの車内で◆
今回の研修旅行は、訪問先が多く、一つ一つの場所で時間をそれなりに割いたので、帰りがやや遅くなった。斉藤副会長は、結びの言葉で一日の研修を振り返り、持ち前のユーモアと機知に溢れる口調で、次のように締めくくられた。

「今日の研修旅行には、女性の方が多く参加されております。皆さん、湖東三山の長い参道を頑張つて登られ、本殿では熱心に安産祈願をされたかと思えます。でも、皆さんはきつと難産だと思えますよ。何故なら、あまりに産道が長いので：ね。」

◆旅行を終えて◆
副会長も指摘されたように、日程的に少し無理があった。企画者の一員として反省している。

天台の若き僧達が、決意を胸に、この長い参道を登り入山し、遙か琵琶湖や比叡の山々、京都に想いを馳せながら、僧坊で日々の修行に邁進する姿が浮かび上がり、思わず胸を熱くした。意義深い一日だった。

郷土の歴史文化に目覚め 地域の未来を語る

三 浦 泰 治

郷土の古(いにしえ)の歴史文化を学びその時代の人々の心を偲び、地域の未来に夢を託す。

郡上市の平成二十五年度集落点検、夢とビジョン策定モデル事業の補助金を受けて、地域に点在する史跡の整備と自然環境の手入れを地元有志団体である「篠脇文化顕彰会」が中心となり一年かけて実施してきました。

同顕彰会は地域の文化遺産を守るため、昭和四十四年有志二十名程で発足されました。この地域は十四世紀の郡上の領主であった東氏が篠脇城を築き、八代約二百三十年にわたり、郡上を治めた拠点であり、現在でもその時代の遺跡が全域にわたり点在している里です。

今回補助金を受け、整備を兼ねて十四カ所に案内看板を設置しました。



①文化財愛護標識板の設置

先の偉業を偲び、郷土の誇り高き文化に住民自身が学習して、自信を持って伝承していかなければとの思いからでした。地域内の絆が薄れつつある現在、交流の活性化を次世代に向けて魅力ある地域にするため、他からの交流人口を増やし、未来に向かって新しい文化を築き上げていくことが重要と考えています。

案内標識板を設置した場所は、八神社、東林寺跡、水神



②文化財愛護標柱の設置

神社、慈永大姉の墓、木蛇寺跡、千人塚、長刀清水、常縁・宗祇連歌の碑、民造岩、篠脇三十三観音、篠脇山靈魂堂の由来、三日坂、八幡神社、守山神社の十

冊子を作成するなど、今後の検討課題としています。今回の事業として、木蛇寺(くじゃじ)から近次(ちかつき)に至る栗巣川沿いの桜並木の整備も実施しました。大和町発足の記念事業として植樹されたものですが、長年手入れができず荒れていました。会員だけでは負担が重く専門業者にも依頼しました。そして、見事な装いとなり、記念に「桜本親水遊歩道」(さくらもとしんすいゆうほどう)と命名し標柱を設置したところです。

明建神社参道の桜並木と共に



③桜本親水遊歩道の草刈り

に、桜の花の季節のみならず、一年を通じて栗巣川沿いの散策を楽しんで頂きたいと願っております。

東家の存在が地元にも歴史、文化的な影響は現在も引き継がれています。恩恵を私たちがはしっかり受け止めて、未来へ大切に伝承していかねばなりません。

豊かな自然と文化財に恵まれた大和町、未来に夢を託し一歩一歩あゆみ続けていきたいと思います。

今回の事業に当たり、顕彰会長滝日準一氏、フィールドミュージアム館長金子徳彦氏には特別なご配慮を頂きました。



④明建神社横大門の桜並木紅葉

文芸欄

短歌

夕やけ

大野 紀子

われ独り深き呼吸をひとつせり
仄白き月の雫あびつつ

病む母に夫の買ひきし額絵なり
白き牡丹のふたつが匂ふ

病みてより三度の冬をゆつたりと
母は清やか夕やけの中

烏五羽アホウ阿房と言ひあひて
夕やけ空を高く去りゆく

初夏

青木 ユリ子

まだ暮れぬ空の彼方の二日月
細目の友のまなざしに似て

朝霧の八重にひろがり鈴の音を
遠く伝えて僧現れり

青空を風押しやりて吹き荒れる
見えぬ力に流されて行く

サクサクと夫が作りし玉ねぎを
食めば初夏はじける如し

田植え期

石神 堯生

水田に映る家並みのシンメトリー
今朝は児童らの列も加わり

田植機の描く放物線それぞれに
少し異なる植え手の癖か

通院を理由に旅行を断る日
咲き継ぐ辛夷を数えて日過ごす

古ぼけた我が家の雛壇上段は
天神・大黒下段はオモチヤ



俳句

草いきれ

寛 明代

棲ついてお菊二十四花石榴

蛍飛ぶ里のぼつとり軋む音

余所の子の金魚掬いを見て飽かず

急流をいく度くぐる囀

草いきれなほ一仕事ふた仕事

ほととぎす

遠藤 富貴子

ほととぎす鳴き声耳に姿目に

山法師風に動きぬ白十字

麦秋や麦かぶれせし日さびいろに

今昔や飛驒の山越え溪山葵

豆植うるまめに働く万倍日

会 員 名 簿 (順不同)

平成 26 年 6 月現在

● 顧問	
簾 勝 美 (剣)	88-2031
日 置 敏 明 (大間見)	88-2254
■ 剣	
森 前 とし子	88-3479
小 池 祐 二	88-4064
小 池 圭 子	88-4064
田 中 和 久 (理事)	88-2200
田 中 康 久	88-2200
山 下 妙 子	88-2405
河 合 恒 (理事)	88-2358
河 合 尚	88-2304
高 橋 義 一	88-3792
日 置 智 夫	88-2730
田 代 全 廣	88-3835
田 代 寿 子	88-3835
加 藤 典 子	88-3687
河 合 利 雄 (理事)	88-3520
加 藤 文 蔵	88-2802
佐 藤 光 一 (会長)	88-3201
佐 藤 八 重 子	88-3201
山 内 博	88-2886
山 内 悦 子	88-2886
林 千 里	88-3333
村 瀬 喜 八	88-2128
村 瀬 方 彦	88-2008
日 置 武 雄	88-2303
■ 大間見	
大 野 一 道 (理事)	88-2230
大 野 紀 子	88-2230
青 木 ユリ子	88-3477
村 井 紀 幸 (理事)	88-2323
村 井 正 蔵	88-2323
野 田 英 志	88-2285
池 田 充 彦 (理事)	88-2796
小 野 江 勉	88-2725
清 水 一 作	88-3086
藤 代 順 行	88-3060
松 井 賢 雄 (理事)	88-3991
坪 井 由 佳 子	88-3990
■ 万 場	
石 神 堯 生 (理事)	88-2413
畑 中 真 澄	88-2441

稲 葉 和 巳	88-2503
黒 岩 弘 己	88-2458
桑 田 守 夫	88-2514
小 倉 義 明	88-3224
小 倉 津 油 子	88-3224
桑 田 洋 一	88-2414
青 地 正 男	88-2447
大 井 正 明 (理事)	88-2894
井 俣 初 枝	88-2758
笥 伸 雄	88-2532
笥 明 代	88-2532
大 井 峰 雄	88-2893
大 井 ともゑ	88-2893
簾 清 子 (理事)	88-4170
大 中 登 志 枝	88-3624
■ 徳 永	
山 内 孝 一 (理事)	88-2616
細 江 幸 久 (書記)	88-4157
遠 藤 富 貴 子 (理事)	88-4141
遠 藤 賢 逸	88-4141
渡 辺 千 恵	88-3280
村 瀬 弥 治 郎	88-2602
渡 辺 睦 子	88-2076
■ 神 路	
山 田 正 代 (理事)	88-2114
白 田 浄 円	88-3461
羽 生 清	88-2271
山 田 味 代 子	88-2844
山 田 敬 子	88-2336
白 田 金 市	88-3883
白 田 路 子	88-3883
野 田 加 奈 枝	88-3460
山 田 幸 子	88-2693
■ 牧	
齋 藤 武 生 (副会長)	88-3922
齋 藤 純 子	88-3922
滝 日 一 正	88-3064
松 森 幹 男	88-3919
遠 藤 伝 司	88-3934
日 置 光 一	88-3001
瀧 日 千 代 美	88-3059
三 浦 泰 治 (理事)	88-9080
粟 飯 原 明 子	88-2362

日 置 人 司	88-2662
滝 日 準 一 (監事)	88-2705
尾 藤 知	88-2353
田 口 勇 治 (理事)	88-3950
遠 藤 高 真	88-2890
野 田 嘉 明	88-3043
加 藤 一 男	88-2870
金 子 政 子	88-3426
早 瀬 ふみ子	88-3327
日 置 康 夫	88-3788
■ 栗 巢	
笥 政 之 助 (理事)	88-4031
島 崎 増 造 (監事)	88-2236
野 田 恵 光	88-4027
増 田 洋 子	88-4041
■ 古 道	
細 川 優 (理事)	88-2861
清 水 克 巳	88-2862
野 口 喜 代 子	88-3084
金 子 徳 彦 (副会長)	88-3063
遠 藤 弘 隆	88-3976
■ 名 皿 部	
佐 尾 千 下 り (理事)	88-3544
有 代 眞 一 (理事)	88-3791
■ 落 部	
常 平 毅 (理事)	88-3837
本 川 喜 代 士	88-3833
本 川 清 子	88-3833
柴 垣 諭	88-3239
柴 垣 香 久 子	88-3239
■ 島 (洞 口 ・ 野 口 ・ 福 田)	
奥 田 昌 明	88-2520
森 藤 雅 毅 (理事)	88-2684
奥 田 弘 親	88-2431
木 島 清	88-3304
森 藤 龍 史	88-2154
森 憲 司 (会計)	88-2554
田 中 篤	88-2792
山 田 長 次	88-3648

正 会 員	98名
家 族 会 員	15名
合 計	113名

◆◆◆ 平成25年度 決算報告書 ◆◆◆

(収入の部)

(単位：円)

項目	決算額	摘要
前年度繰越金	4,711	
会員会費	208,000	正会員2,000円×98名 家族会員1,000円×12名
役員研修会費	17,000	
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	8,074	春季日帰り研修残金 預金利息
合計	318,785	

(支出の部)

(単位：円)

項目	決算額	摘要
会議費	13,494	
総会費	5,014	お茶 感謝状額
会議費	8,480	執行部会 運営各部会 役員会
事業費	167,930	
会報発行費	51,345	「文化財やまと38号」300部
奉仕活動費	11,844	文化財清掃奉仕作業 傷害共済
役員研修費	20,969	資料代 弁当・お茶代
文化財保護費	13,650	文化財標柱設置 七日祭・赤保木祭奉納
研修旅行費	20,122	秋季日帰り研修補助
記念事業積立金	50,000	
事務局費	43,320	
消耗品・事務費	30,290	DVD寄贈29ヶ所 用紙代・印刷代
通信費	13,030	はがき・切手 メール便送料
負担金	50,000	県協会:30,000 市協議会:20,000
予備費	38,000	香典3 供花1
次年度繰越金	6,041	
合計	318,785	

◆◆◆ 平成26年度 予算(案) ◆◆◆

(収入の部)

(単位：円)

項目	予算額	摘要
前年度繰越金	6041	
会費	211,000	正会員2,000円×99名 家族会員1,000円×13名
役員研修費	26,000	
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	459	預金利息、他
合計	324,500	

(支出の部)

(単位：円)

項目	予算額	摘要
会議費	15,000	
総会費	5,000	お茶
会議費	10,000	執行部会 運営各部会 役員会
事業費	210,000	
会報発行費	70,000	「文化財やまと39号」300部
奉仕活動費	15,000	文化財清掃奉仕作業 傷害共済
役員研修費	30,000	資料代 弁当代
文化財保護費	15,000	七日祭・赤保木祭奉納 文化財標柱設置
研修旅行費	50,000	春季・秋季日帰り研修補助
記念事業積立金	3,0000	
事務局費	35,000	
消耗品・事務費	20,000	用紙代・印刷代
通信費	15,000	はがき・切手代 メール便送料
負担金	50,000	県協会:30,000 市協議会:20,000
予備費	14,500	
合計	324,500	

平成25年度の歳入・歳出処理について監査を行った結果、適正に処理されてきました。
平成26年 5月21日

監事 島崎増造



滝日準一



編集後記

「文化財やまと」の編集を初めて担当することとなりました。

五月、会報の発行を心配された先輩諸氏からの忠告でようよう動き出したものの、原稿依頼した方からは、もっと早くに知らせてほしいとの、お叱りの言葉をいただきました。

本号の記事の中で、殊に、日置智夫氏の「大和町観音堂石仏について」は、二六に及び、内容の奥深さには、深く感動しました。

三浦泰治氏は、牧地区の皆さんの取り組みの一端を記して下さいました。地域ぐるみの活躍に脱帽します。

編集委員の一致協力のお蔭で、提出いただいた原稿の校正・編集など、初体験のことばかりの中で、ようやく会報第三十九号の発行にたどり着きました。

今回の反省をもとに、次回からは年間を通してしっかりと取り組む決意をしました。記事執筆していただいた皆様、深く感謝申し上げます。

(幸久)